

クセノフォン・奥田正造の教育行為に見られる共通性

——哲学・教育学の盲点を顕在化する側面に着目して——

新妻千紘 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科言語文化系教育講座

戸田 功 埼玉大学教育学部言語文化専修国語分野

キーワード：クセノフォン、奥田正造、主体性、哲学、教育学

1. はじめに

今まで五本の論稿を通して大村はま「国語科単元学習」の理念型の構築を試み¹、六本目の論稿（以下、第六稿）において大村はま及び大村はま「国語科単元学習」において体现されている主体性のあり方を〈受動的主体性〉と位置付けた²。〈受動的主体性〉とは、生徒と教師の上下関係をより固定化していく指向性を持つ主体性のあり方を意味する。〈受動的主体性〉に基づく行為は、どのような相手や状況においても、上下関係を強化するという点で常に同質の結果が生じるため、行為の解明が比較的容易であった。一方、大村はまと対照的に位置づけ解明を試みた大村はまの師、奥田正造の行為は対等な関係を前提として相互的・流動的に行為が変容していくため、従来の〈単一型理解的方法〉では解明が困難であった。そこで、前稿³（以下、第七稿）では奥田正造における主体性のあり方を〈能動的主体性〉と位置付けた上で、〈能動的主体性〉に基づく行為を解明するための新たな方法として〈関係連動型理解的方法〉を確立した。〈単一型理解的方法〉が個の行為の一貫性を構築することで研究対象の全体像を解明するのに対し、〈関係連動型理解的方法〉は関係を前提とした行為に創造的に見出される〈主観的認識〉の一貫性を構築することで解明がなされるという違いがある。〈主観的認識〉とは、国・文化・価値観に関わらず全ての人が共有可能な主観性を伴う認識を意味し、言語学者バンヴェニストの論稿「ことばにおける主体性について」「動詞における人称関係の構造」といった論稿に基づいて論証された概念である。

ところで、前稿までの議論においては、理論的な前提が明らかになっただけで〈能動的主体性〉及び〈主観的認識〉の実態は捉えきれていない。〈受動的主体性〉は固定した上下関係に従属した判断しかなされないという点で「受動的」であると言えるが、〈能動的主体性〉における「能動性」とはどのような点に見出されるのだろうか。また、〈主観的認識〉は関係を前提に創造的に発見されると指摘したが、実体的に存在を示すことは可能であろうか。さらに、発見された認識はどのような意味において国、文化、価値観に関わりなく共有可能であると言えるのだろうか。

我々は、奥田正造の他に、〈能動的主体性〉に基づく行為及びその結果として現れる〈主観的認識〉を捕捉可能な人物として、古代ギリシャの哲学者クセノフォンを見出した。

クセノフォンは古典古代においてはプラトン以上、またはプラトンと並び称されていたソクラテスの弟子である。クセノフォンと奥田正造は時代や身分、信仰する宗教が大きくかけ離れているのにも関わらず、男尊女卑の時代にあって女子教育を提案している点、家政を重要視している点、空腹は食事を充実させるという言説を共に残している点、現実生活に結びつかない学問を共に忌避している点、思想の確立に宗教が重要な位置を占めている点等、奇異に思われるほど共通点が多い。中でも注目すべきは、両者ともにある種の修行の重要性を指摘しており、それは〈主

観的認識)を発現させるための鍛錬の方法を示していると思われる。さらに、クセノフォンの著作『ソクラテスの思い出⁴⁾』にはそのような鍛錬を踏まえてどのように相互主観的な境地に至るかを推察可能な実践事例が数多く収録されている。そこで本稿では、クセノフォン・奥田正造の実践の共通性を検討することで、〈能動的主体性〉及び〈主観的認識〉の実態により深く迫っていきたい。

ところで、奥田正造・クセノフォンの共通点としては他に、すべての著作が今日まで残存しているのにも関わらず、それらに対する学問的・思想的位置づけが明らかにされていないという点が挙げられる。したがって、両者の言説に着目し評価することで、教育学・哲学が見逃しがちな盲点が浮き彫りになることを期待したい。

2. クセノフォン・奥田正造の共通性から見出される〈主観的認識〉の鍛え方

2-1 両者に見られる独自性を見出しづらい具体的方策の提案

クセノフォン・奥田正造の共通性を論じるにあたって、まず、両者の至極当然と思われるような独自性を見出しづらい言説に着目していきたい。

クセノフォンの代表的な著作の一つに『オイノミコス⁵⁾』がある。『オイノミコス』はどうすれば財産をうまく運用できるか教を乞うクリトブロスとそれに応えるソクラテスの対話から始まり、中盤以降は家政と経営に優れた賢人イソコマコスにソクラテスが教を乞うたときの話をクリトブロスに語り伝えるという対話形式で構成されている。冒頭、中盤以降の双方で触れられ、重要性の強調されている言説の中に、整理整頓と健康に関するものがある。

冒頭では、同じ仕事に従事しているのにも関わらず、裕福な暮らしと貧しい生活を送っている人々を比較してその違いが何であるかがソクラテスによって論じられている⁶⁾。その一例として、大金がかかっている、雑多な種類の家具が無造作に配置され必要な時に役に立たない事例と、費やす金銭がわずかであっても、各々の家具が最も適切な場所に配置されているため、必要な時に有効に機能する事例が比較され取り上げられている。また、中盤以降では、賢人イソコマコスが自分の妻に対して整理整頓の有用性と美しさを教え、整理整頓とは良い法律を作ってそれを守るものを称賛し、反するものを罰することで秩序と平和を維持するのと同じような仕事であると説明している⁷⁾。ちなみに、イソコマコスの整理整頓に関する妻への手ほどきは邦訳書では十三頁にも渡って仔細になされている。

一方、奥田正造における整理整頓に通ずる教えとしては、茶道と掃除に関する言説に見ることができる。「和敬清寂の醍醐味 「茶道」と日本人の人生観に就いて⁸⁾」には、「茶は最も簡素なものである。即ち住居はよいものは不要である。要は清浄に住みこなすことである。衣もさつぱり着こなせばよい。どんなものでも、親切をよく受け入れ、上手に正しくよく着、又きれいに住みこなしてあれば、少しも恥かしくない⁹⁾」と述べられている。整理整頓の機能性・有効性を論じたクセノフォンのソクラテスと、和敬清寂を語る奥田正造の言葉は、表面上は趣旨が異なるようにも見えるが、言っている内容はほぼ同じである。

また、奥田の「私の女子教育について¹⁰⁾」では、掃除に関して「指導しつつ工夫すれば、箒の扱ひや雑巾掛けは実に興味あるものである。はき集めたる塵の処分も砂上に残る箒の目も乃至雑巾の大きさから扱ひ、拭き清める板の中、長さ、バケツの水の分量をかへる度数、もつと大切な自己腹筋の使用自由なる体のこなし、次ぎから次ぎへとわく喜びを日課行持として、師弟共に励む

姿は来訪の親を驚かし、健康の喜びを感謝せられる語り草ともなる¹¹」という記述がある。掃除用具の機能が最大限に引き出せるよう試行錯誤する喜びを語るそのあり方は、ソクラテスとイソコマコスの言説に共通するものがあると言えるだろう。妻に対して、イソコマコスも同様に、熱心に働くことでより健康に、かつより美しくなることができるという点を指摘している¹²。

両者の言説は興味深いものではあるが、整理整頓や健康の有用性はわざわざ指摘するまでもない当たり前のことと思えてしまい、思想としては取り出しづらいほどである。一方で、独自性が見出しづらいこのような具体的方策をあえて取り上げて論じているという点に、両者の独自性を見ることもできると言えるだろう。

2-2 両者に見られる宗教的行為の機能と目的

前項では、両者に共通する独自性が見出しづらい言説を取り上げたが、両者の言説や実践の中には、他にも評価したり思想性を見出すのが困難なものがある。それは宗教的行為に関する言説である。

クセノフォンの著作『ソクラテスの思い出』冒頭には、ソクラテスがしばしば占いを行ったこと、また「神^{ダイモニオン} 霊」から諭しを得ていたことに触れている¹³。プラトン版のソクラテスにおいても「神^{ダイモニオン} 霊」はしばしば登場し有名でもあるが、神秘的かつ非合理的な現象と理解されるせいか、占いや「神^{ダイモニオン} 霊」の声がソクラテスの思想においてどのように機能しているか解明した先行研究は管見によるところ見当たらない¹⁴。

ソクラテスは親しい人にも占いをすることを勧め、どのような場合に占う必要があるかという点について次のように述べていたと言う。

楽しみを思って美人を妻とした者も、この妻ゆえに難儀を見るかも測られず、国家の権門と縁故を結んだ者も、彼らゆえに国を追われることも予見できぬ。これらの事柄を少しも神秘にふれることと考えず、一切人智をもって測れることとと思っている人々を彼は気のふれたものといった。気のふれた者であるのは、また、神々が人間に自らの智恵で判断できるようにしてくれてあることに占問いをする連中が、それであった。(中略) 要するに、神々が知識によって行うようにしてくれたことは、学ばなくてはならぬし、人間に明白でない事柄は、占いを通じて神々から伺うようにしなくてはならぬ、神神はその嘉みしたもう者には諭しを与えたもうから、というのである¹⁵。

クセノフォンの言葉を踏まえると、占いで「諭し」を得る、すなわち何らかの実質的な利益を得るためには、自らが現実に影響を及ぼせる範囲とそうでない領域を明確に区別することが前提となっていると言えるだろう。一見、簡素かつ容易な教えと思えてしまうが、その教えを達成できていない例として、「万有の性質」や「宇宙」の性質を論じる人々が挙げられている。

彼は、この人たちにはこうした事が人間には発見不可能であることが、わかっていないのだからと不思議がった。それに、かような問題の論議の大家を以て任ずる人々が、決して意見一致せず、お互いに狂人さながらの恰好を呈しているのではないか。狂人のある者は恐ろ

しいことを恐ろしいと思わない、ある者は怖くないことをこわがる。ある人々は衆目環視の中で何を言おうが、何をしようが、一向恥と思わないのに、ある人々は人混の中へ出ることさえいやがる。またある人々は神域も祭壇も、またそのほかのいかなる神聖物にも、敬意を払わないのに、ある人々はそのこれらの意思や木や獣までうやまう¹⁶。

人智の及ばないことに拘泥し続ける、衆人環視の中何をしても恥と思わない、敬意や恐怖の対象を適切に判断できないといったソクラテスが挙げる「狂人」の様相は、すべからず現代にもそれこそ「当たり前」に散見している。したがって、自らが現実に影響を及ぼせる範囲とそうでない領域を明確に区別しなければ達見は得られないというソクラテスの教えは決して容易でも「当たり前」でもないと言えるだろう。

では、占いが合理的かつ的確な判断を前提としているならば、なぜ適切な判断の過程に神々が介在しているのだろうか。

この問いの答えは奥田正造の実践を手がかりに得られると思われる。奥田は「私の女子教育について」で、「眼前実相の真を感得し、驚異し、敬虔の念を生じ、感謝の生活に入り、勤儉力行の実践に進ましむためには、自然観察を精しくせしむるに若くはない¹⁷」として、女生徒を自然科学の専門家と共に植物や野鳥の観察に連れ出したり、海岸や溪谷を訪ねたりしたと言う。壮大な自然の様相こそ個人が迂闊には影響を及ぼせない領域であると言えるが、奥田は敬虔さや感謝、勤儉力行の姿勢はその自然に触れることで培われると指摘している。要するに、神々とは個人の能力の及ばない領域を象徴しており、神々に対する信仰は、個人の能力の限界を自覚させる効用があると言えるだろう¹⁸。また、それに付随して、日々の生活の中で自らの実力や影響とは関係なく得ている恩恵に対して感謝の念や慎みの姿勢を持つといった効果も考えられる。

さらに、奥田の行為の中には信仰が実際の問題解決に役立っている例をいくつも見ることができる。例えば、戦争で殺人を犯した記憶に囚われ悪夢に苦しんでいると相談を受けた奥田正造の対応を引用してみたい。

野戦から帰ったのは昭和十五年の四月、私は帰って一か月過ぎてから、時々夢を見るようになった。そしてその夢のつづきの果ては、きまって野戦で倒した支那の将校の最後の場面である。この場面の凄惨さが、夢の最後にきまって現われて、うなされ、全身玉の汗で、その後一、二時間眠れず、苦労が重なり、時には一週間に二、三回も見る。私は先生にこの事を話した。その時、先生は、暫く眼を閉じておられたが、突然立ち上がって、後むきになられ、帯を解かれた。先生の手には、長い紐のついたお守袋があった。法隆寺の管長から呪文を書きつけたお守をいただき、十数年肌につけておられたそのお守を私に持たせ、「これをお前が今日から肌身につける。そして佛頂尊勝陀羅尼を毎日何十回も唱えるように。そうすることによって、その夢もやがて見なくなるだろう」と教えられた¹⁹。

この記録を残した武士成は、相談した晩、朝まで夢を見ずにぐっすり眠ることができたと記している。その後、夢を見ることはほとんどなくなり、その後は、陀羅尼を唱えるだけでなく一万

部の写経も行ったと言う²⁰。

信仰を持たない人間にとっては、お守りを持ち陀羅尼を唱えるだけで悪夢を見なくなると断言できる奥田正造の胆力は並大抵でないと感じられる。また、一見、迷信めいた印象を受けるかもしれない。しかし、ソクラテスの言葉を手がかりとすると、このエピソードに理知的な理解を示すこともできる。すなわち、「死」という取り返しのつかない状況に執着することはソクラテスの定義する「狂気」に当たるが、状況を変えることができずとも「死」に対する自己の認識を変容することは、各々の修練によって可能であろうという極めて的確な判断を奥田は下していると推測できるということである。奥田は、宗教に仮託した具体的な方策を使って相談者の認識を変容させるべく説得を行ったと理解できるのではないだろうか。

十数年肌につけていたというお守袋を手渡すという行為は、奥田のこの問題に真摯に取り組む姿勢や解決のための覚悟を相談者に示していると言える。また、悪夢はおよそコントロールできないと思われがちであるが、何十年にも渡って仏教を信仰し修行を重ねてきた奥田による力強い断言の言葉は、相談者に対して状況を打開することが可能であるという希望的認識をもたらすことに十分寄与していると考えられる。先ほど、神々の存在は個人の能力の及ばない領域を自覚させる効用があると指摘したが、この例を踏まえれば、逆に個人の能力の及ぶ範囲を具体的な現実の中で明確化させ、拡大させるという効用も同様に指摘することができるであろう。

以上を踏まえれば、クセノフォン・奥田正造がそれぞれの信仰において自らの理解を超える神秘的なものの存在を前提にしつつ、現実的に判断し行為することは、非合理的な妄想や神秘性への妄信によるものではなく、現実的かつ合理的な判断を行うことを目的に、その精度を高めていくために必要であったと結論づけることができるであろう。

2-3 クセノフォン・奥田正造の共通性から見出される〈主観的認識〉の鍛え方

それでは、クセノフォン・奥田正造に共通していた整理整頓や健康、宗教的背景を持つ行為が〈主観的認識〉の形成にあたってどのように関与しているのか考察してみたい。

第七稿では、〈主観的認識〉とは国・文化・価値観に関わりなく共有可能な「認識」であると位置づけたが、整理整頓や健康はまさしく〈主観的認識〉に該当すると言える。仮に特定の価値観や文化において乱雑な状態や不健康な状態を好む場合があったとしても、整理整頓がなされている方がより効率的で機能的であることは否定できないだろう。また、健康な状態がより優れていることは言うまでもない。したがって、あまりにも常識的と思える整理整頓や健康の効用の重要性が著作で取り上げられているのは、「良さ」（あるいは「適切さ」）に対する感覚を鍛えるためであるというのが理由の一つとして考えられる。実際、〈主観的認識〉に該当するところらで意味付けた行為に関して、クセノフォン・奥田正造は当人が身を以て実践し、修練によってさらに鍛えていかなければ意味をなさないとしている。

着目すべきはこれらの教えの稀に見るほどの汎用性の高さの実績の大きさである。クセノフォンと奥田正造は〈主観的認識〉や〈能動的主体性〉という観点を持たなければ全く接点を見出せないと思われるほど一般にはかけ離れたところに置かれた存在である。前者は古代ギリシャの哲学者、また軍人でもあり、後者は日本の明治末期の教育者、また茶道家でもある。国、時代、宗教、文化、全てがかけ離れていると言っても良いかもしれない。これほどかけ離れた両者の思想

の共通性は、その思想の汎用性の高さを示していると言えるであろう。さらに、両者がそれぞれの実践によってもたらした実績は挙げれば枚挙に暇がないほどである。例えば、クセノフォンは敵地の中心で上官が全員殺されてしまい途方にくれ立ち往生していたギリシャ人傭兵部隊のペー万数千人を主導し、六千キロに及ぶ脱出を成功させている。この詳細は著作『アナバシス²¹』に見ることができるが、随所でソクラテスの教えが役立てられている様子が見られる。奥田の実績は今までの論稿でも繰り返し触れてきたが、学力偏重の現代ではあり得ないような状況に置かれた女子がその境遇においても力強く生きることができるように、家事・炊事・掃除・写経・読経等を徹底する教育を成立させ、実際に戦中・戦後にかけての混乱期に母親として家族を飢えさせずに生き延びることができたのは、奥田のおかげであったと多くの卒業生がそれぞれの振り返りにおいて書き残している事実は驚嘆に値すると言うことができるであろう。

先も述べたように、戦後から現代にいたるまで、奥田の思想や実践はほとんど忘れ去られ省みられることがなかった。また、クセノフォンの思想や著作もプラトンと比較すると具体的方策が多く、本稿に論じたように独自性や有用性が読み取りづらいという要因からか、現在では「ソクラテスの哲学的含意を十分にすくい挙げてはいない」とされるなど、プラトンと対比するような形で低く評価されている²²。しかし、価値観の対立如何に関わらず、誰に対しても説得が可能で、かつ誰でもすぐに鍛錬に取り組める精練された〈主観的認識〉のあり方が提示されている両者の著作に見られる特徴は、他には類を見ないものであり高く評価されるべきであろう。

3. クセノフォン・奥田正造の共通性に見る〈能動的主体性〉の特質

3-1 クセノフォン・奥田正造の女子教育に見られる対等性

クセノフォン・奥田正造の言説に共通している点の一つに、双方ともに女子教育に着目していることが挙げられる。どちらも男尊女卑の時代にあつて女子教育の重要性を指摘していること自体特異であるが、その内実においても多くの共通性を見ることができる。

『オイコノミコス』では、古代ギリシャの女性は結婚当時「全くの少女で、最小限のことしか見聞きさせてもらえなかった²³」という前提を確認した後、女性が家庭を巧みに経営するためには当然教育が必要であろうと指摘されている²⁴。このような女子教育の必然性は奥田も同様に指摘しており、母親の教育が足りないという批評家気取りの指摘があっても実際にその問題に取り組む者はおらず、家政の中心に立つ母親のあり方を教育することが成蹊女学校の女子教育の第一の狙いであったと述べている²⁵。女子教育の必要性の指摘、そして実際的にその方策を明らかにすることを行っている点、さらにクセノフォン・奥田正造が想定する女子教育を行うのにふさわしい年齢についても一致している²⁶事を両者の著作から確認することができる。

『オイコノミコス』に登場するソクラテスは、賢人イスコマコスに妻を教育する上で何を行ったのかを尋ねていく。イスコマコスが最初に行ったことは、神々に犠牲を捧げて祈り夫婦が対等な立場にあるという点を妻に説得することであった²⁷。イスコマコスは巣のリーダーである女王蜂を例に挙げて、家政を運営する女性の立場の重要性を強調し、謙遜する妻に対してむしろ男性が女性の従者となる方が望ましいと明言して見せる。

奥田も「対等性」を非常に重んじているが、それは男女の対等性という形では語られない。当時は夫婦が対等性を確認し合うような状況は全く想定できず、嫁入りした女性は姑に厳しい扱いを受け家庭では最も弱い立場にあることが当然であった。奥田の女子教育における「対等性」の実現は、対等であるという前提を口頭で確認し合うクセノフォンの場合よりもさらに厳格に、過

酷な状況にあっても打ちのめされることなく苦境に対して自発的に向き合う姿勢を意味し、状況を打破するだけでなくそれを凌駕することのできるような精神性を鍛えることが不可欠であった。

クセノフォンと奥田が想定する女性の立場は相当異なるように思えるが、興味深いことに、自発性の鍛錬のあり方には顕著な類似性を認めることができる。先にも触れているが、クセノフォンが主に挙げているのは、適切な整理整頓、化粧を止めること、自ら率先して働きながら健康を保つことである²⁸。適切な整理整頓は〈主観的認識〉を鍛えるだけでなく、自ら秩序を作り出し状況を自在にコントロールできる環境を生み、化粧を止めることは虚勢やおもねりの心性を抑えさせる。また、率先して働くことは適度な運動と健康に繋がり、年老いた後も家の中で尊敬され愛される美德を培うことになるとイスコマコスが説明する。奥田の場合は専門とする茶道の精神を教えることでこれらを実践させており「茶の稽古で身体の自由を練る」「寒暑を凌げば足る衣服に装飾が加はり、うつくしくなりすぎると働くにおつくうになる²⁹」といった記述はクセノフォンの主張と類似していると言える。先に触れた、掃除に取り組むことで身体を鍛え健康に至るという奥田の主張も同様である。他にも食欲や情欲、金銭欲に囚われるべきでないことを指摘する記述にも顕著な類似性が見られる。このようにクセノフォン・奥田正造の女子教育に関しては多くの共通性を挙げるができるが、どの事例に関しても共通しているのは、自発的に状況を主導する立場を確立し、裕福であっても貧しい境遇にあってもひたすら状況に流されるだけの隷属的な人間とならないことが教え諭されている点であろう。

3-2 クセノフォン・奥田正造の女子教育に見られる特異性

前項では女子教育の具体的方策から共通性を検討したが、着目すべき共通点として特に両者が論じている「女子教育」の特異性を挙げるができる。

日本大百科全書には「女子教育」について次のような記述がある。

欧米諸国でも、女子教育は、女性の社会的地位の低さと深くかかわって、男子のそれと区別され、また遅れて発達している。古代ギリシア・ローマ時代や中世、近代初期において、女子は公的教育の対象とは考えられず、家庭で母親などから授けられる家事がその教育の中心であった。中世以降、修道院、宮廷、寄宿学校、修道会などで行われた上流子女の教育も、礼儀作法や芸能を主たる内容とし、知育はほとんど顧慮されなかった³⁰。

通常の「女子教育」が公的教育における女子への知育を指すのに対し、クセノフォン・奥田正造は公教育にも知育にも特に関心を寄せていない。男女の対等性を含みつつも家政や母親としての教育が優先されて論じられている。女性に対する教育を家政や母親としての教育に限定することは差別的であると捉えられかねないが、なぜ両者はこれほど家政を重要視しているのだろうか。

奥田正造の著作からは、『『在校中の学科だけの優等生』や、所謂良妻ぶりに夫を困らせる新しい女は作らぬことにし、一生励む女を作りたい、その心の基礎を与へたいと思ひ立つた³¹』という記述や、自然観察の授業に関して「知識の量を注入するは第二義である³²』といった記述を見ることができる。ここからは、知育は母親としての教育を行うにあたって実際的な効果を及ぼしづらく、また、評価されることを期待する受動的な姿勢を呼び起こしたり、謙虚さや感謝の念を失わせたりする側面があるという奥田の考えを読み取ることができる。前項の議論との一貫性を認めることができるが、やはり、なぜ女性や母親を対象にこのような教育が強く必要とされているか

という問いの答えに至るものであるとは言えない。さらに、クセノフォンの著作を検討することでこの問いの究明を試みてみよう。

クセノフォンが書き残しているソクラテスの教えの中には次のようなものがある。

彼はまた、正しく教育された人間は、各々の問題についてどの程度までこれに習熟すべきかを教えた。例えば、幾何学は、必要の生じた際に正確に土地を測量して、これを引きとり、または譲渡し、あるいは分割し、または資産を明示できる程度にまで、これを学ぶ必要があると言った。しかもその習得は大変容易で、測量に心をむける者は、土地のひろさがどれくらいであるか知ると同時に、測量法の知識も得て来れるのであった。けれどもむずかしい作図の問題に入るまで幾何を学ぶことは、彼は賛成できないとした。なぜなら、一つにはこれがなんの役に立つとも思えないからだと言ったが、しかも彼自らは幾何学を知らぬ者ではなかったのである。しかし、もう一つには、彼の言うのに、この種の勉強が優に人間の一生をついやすに足り、それ以外のたくさんの有用な学問を全然さまたげてしまうからであった³³。

上記の記述は、クセノフォンと奥田正造が公教育や知育に関心を示さない理由として理解することができる。ソクラテスは実生活上に効用の見出せない勉学を忌避するように教え、「万有の性質」や「宇宙」の解明を試みるアナクサゴラスのような学者たちを狂人と呼んでいる。ソクラテスになれば「在校中の学科だけの優等生³⁴」や「所謂良妻ぶりに夫を困らせる新しい女³⁵」の類も現実を顧みず自己を過信する狂気にさらされた状態であると言えるだろう。

興味深いのは、ソクラテスの教えが女子教育や男女の対等性とは全く関係のない文脈で語られている点である。その理由は、クセノフォンや奥田正造が育てようとした人間像、すなわち、どのような状況や人間関係においても、さらに食欲や情欲、金銭に対する執着に対しても隷属せず、常に能動的で自由な生き方を志すそのあり方は、ソクラテスその人とほぼ同一であるためではないだろうか。ソクラテスは誰にでも分け隔てなく教えを授け、教えを授ける行為が自らを縛る事のないように決して金銭を受け取らず、食事や生活に必要な金銭はソクラテスに好意を抱いた人間に賄ってもらっていたと言う³⁶。このようなソクラテスの生き方は、金銭を目的とした労働をしない当時の女性の生き方とまさしく合致していると言えることができる。

したがって、クセノフォン・奥田正造が家政や女子教育に強い関心を寄せていたのは、金銭を目的とした労働ができなかった当時の女性の立場にあってこそ高められる資質に着目していたからであると結論づけられる。そうであれば、女性が男性に従えることこそ望ましいと述べた賢人イスマコス言葉は、謙遜する妻に対する方便ではなく、字義通りの意味に理解することが可能となる。両者の思想は差別を含むものではなく、公教育における知育よりも優れた教育のあり方を新たに提案するものであったと言えるであろう。

3-3 クセノフォン・奥田正造の思想の共通性から導かれる〈能動的主体性〉の特質

金銭を伴う労働をすることができず家庭にあって冷遇されていた女性こそが、ソクラテスのような自由人としての生き方を学び能動性を鍛錬するにふさわしい環境にあるという理解のあり方は斬新かつ発見に満ちたものと言えるが、クセノフォンや奥田正造はなぜ今まで全くと言っていいほど評価されてこなかったのだろうか。

クセノフォン、奥田正造、そして、ソクラテス³⁷の3人に共通しているのは、男女の対等性や平等な権利を持っているという点について明文化していないという点である。おそらく、三者にとって男女同権や男女平等といった理念は議論する必要もないほどに当然の前提であったのだろう。古代ギリシャには市民権を持った自由人が奴隷を使役するという身分制度が存在したが、クセノフォンもソクラテスも制度改革をすべきであるというような議論は同様に行なっていない。両者は自由人としての身分を持っていても、食欲や情欲、睡眠欲、金銭欲に弱く自分を抑制できない人間や健康を維持できない人間は奴隷とみなし、同様に、善悪を適切に判断し、正しくあることが有益であることを知り、なおかつそれを自らの喜びとできるような人間は奴隷であったとしても自由人として歓待すべきであると述べている。身分や社会制度の改革といった外部からの評価を焦点とする議論は、受動性や隷属性をその内に含むことを避けられないが、注目を呼び起こしやす。一方、個人の資質の育成や自らの認識を問い直すという行いは本質的でありながらそのプロセスや内実を可視化することが困難であると言えるだろう。第七稿で〈能動的主体性〉における行為は蓄積がされづらく、また、理解や解明のプロセスを明示しづらいという仮説を示したが、本項で検討したクセノフォン・奥田正造の事例は今までの議論の推察と見事に符合している。

第六稿では、奥田正造における「対等性」を相互の感情に基づく「共感的」なものであると理解し、その行為の特質を《共感的自発性》《共感的主導性》として位置付けた。一方、クセノフォンの行為は「共感」というよりは、相互に対等であることがより相応しく有用であるという判断や納得に基づいているように見える。したがって、本稿では、クセノフォン・奥田正造から導かれた〈能動的主体性〉の特質を、「対等性」「自発性」「主導性」として位置付けることにしたい。

4. ソクラテスの実践に見る〈能動的主体性〉と〈主観的認識〉の関係性

4-1 アリスタルコスの説得に見る〈主観的認識〉の機能の実態

第4項では、今まで論じてきた〈主観的認識〉と〈能動的主体性〉がどのように連動し、どのように機能しているかについて、クセノフォンが書き残したソクラテスの実践を検討することで明示してみたい。

まず『ソクラテスの思い出』に収録されたアリスタルコスの逸話³⁸を検討してみよう。アリスタルコスはアテナイの内乱の最中取り残されてしまった姉妹や姪、従姉妹たち、合わせて十四人も自由身分の女性達を養うことができず飢え死するしかない絶望していた。ソクラテスは女性達を奴隷身分の者達と同じように働かせればよいとアリスタルコスに提案するが、自由身分でなおかつ血縁者でもある女性達を奴隷のように扱うことはできないとアリスタルコスは躊躇する。そこで、ソクラテスは次のようにアリスタルコスを説得したと言う。

怠けているのと、有益な仕事に励むのと、人間はどちらが一層分別があるのだろうか。仕事をするのと、怠けていて物資の論議をしているのと、どちらが一層まともな人間であろうか。その上いまのありさまでは、君は彼らを受せず、彼らは君を愛しないと思う、君は彼らが君に損をかけていると考え、彼らは君が彼らを厄介がっているのを見て取るのだ。かような状態は、憎悪をさらに増大させ、いままでの感謝を減少させる危険がある。しかし、君が上に立って彼らに仕事をさせるようにするならば、君は彼らが君の助けになるのを見て彼らを受するようにし、彼らは君が自分たちの喜んでいるのを知って君を好くようになり、共に以前の深切を楽しく思い浮べ、その深切の感謝をさらに増し、そしてそのために一層お互いに睦まじく、一

層親しみのあるものとなろう。もとより、何か恥かしい仕事をするのであったら、それはなるほど、死んだ方がましだ。しかし、彼らの知っている仕事は、誰が見ても婦人の仕事してもっとも立派な、いかにもふさわしい仕事と思える。そして、自分の知っている仕事が全て、もっとも楽に、もっとも速く、もっとも見事に、またもっとも気持よくできるものだ。されば、躊躇しないでこれを彼らにすすめなさい、それは君のためにもまた彼らのためにも利益となり、そしてたぶん彼らも喜んで君の言葉にしたがうであろう³⁹。

多少長い引用であるが、ソクラテスの助言は第3項に論じた〈能動的主体性〉の特質を全て含んでいると言える。つまり、身分の違いを気に掛けるアリスタルコスに対して、ソクラテスは実質的に十四人の女性達がどのような能力を持ち、どのような結果を生むことができるのかという点に議論の焦点を当てる。そして、アリスタルコスと女性達の「対等性」は、女性達に奴隷身分の仕事させないことによって維持されるのではなく、お互いの行いが相互に喜びや安心、利益をもたらすことによって生まれることを巧みに指摘する。さらに、自らが最も得意とする仕事をこなすことが自分にとっても自分を養う相手に対しても喜びや愛情を生むという状況は相互に「自発性」「主導性」が発揮された状態であると言えるだろう。

第2項では殺人の記憶に苦しむ武士戊に対する奥田の説得と理解できる対応を取り上げたが、ソクラテスと奥田の説得に共通しているのは、双方が状況そのものを変えることはしていないという点である。問題の当事者の能力や才能とは全く関係なしに、先入観や執着によって固定化されていた認識を向き変えることで「良い」結果を生み出していると意味づけられるだろう。

一般的に「良さ」や「適切さ」といった感覚は個人の価値観やそれぞれの状況に応じて変わり、明確に定義されないことが多い。しかし、クセノフォン・奥田正造、そしてソクラテスにおける「良さ」や「適切さ」は、個々の問題や状況に応じながらも常に同質の整合性と一貫性を維持した解決策を提案しているように見える。あらゆる状況や人間関係に即応する整合性や一貫性は、三者の日々の修練によって鍛えられ明晰化された〈主観的認識〉として説明することができると思われる。ここでは第七稿に論じた〈主観的認識〉の機能、すなわち〈能動的主体性〉に基づく行為によって国・文化・価値観に関わりなく共有できる認識が明晰化されることで、判断や結果に同質の整合性と一貫性を与えるという機能の実態を確認し、示すことができたと言えるだろう。

4-2 エウテュデモスの説得に見る関係概念としての〈主観的認識〉

続いて、本稿の主眼でもある教育行為に着目してみたい。『ソクラテスの思い出』には、「最善の教育を受けていると信じ、多いに智慧を自負している⁴⁰」秀才エウテュデモスをソクラテスが教育しようと試みる逸話⁴¹がある。年若いため年長の者たちが議論を交わす広場（アゴラー）に入ることのできない少年エウテュデモスが広場の近くの店によく座り込んでいることを知ったソクラテスは、仲間を連れて何度かその店を訪れる。一度目は仲間との会話に混ぜ込んで、優れた人間になりたければ師匠を持たないのは愚かしいことだと話してエウテュデモスを挑発し、二度目はソクラテスの知恵に感心することを恥と認めてそれを隠そうと大いに用心するエウテュデモスを仲間との会話の中で引き合いに出してからかってみせる。三度目には優れた政治家となるにはより習得困難な技術を身につける必要があるのだから、他の仕事に比べてより多く励む必要があると談義してみせる。ソクラテスは二度、三度と仲間と共に同じ店を訪れて、エウテュデモスが自らソクラテスの話を聞きたいという自発的な気持ちを抱くまで一度たりとも直接エウテュデモ

スに声をかけないという慎重さを発揮する。

ようやくエウテュデモスが心を開いたと思われた時、ソクラテスは仲間を連れずに一人で店に出かけて行き、一対一でエウテュデモスと十四、五ページにも渡る対話を繰り返す⁴²。そしてソクラテスによって自らの未熟さといたならなさを自覚したエウテュデモスは「すこぶる意気消沈し、しみじみ己れのくだらなさを味わい、全くもって一個の奴隷であるのを感じながら、帰って行った⁴³」という。しかし、エウテュデモスはそれ以降片時もソクラテスのそばを離れずソクラテスの行いを真似しようと努力したため、ソクラテスは「もはや彼を苦しめることはやめ、知らなくてはならぬと思う事柄や、日常生活にもっとも必要と思う事柄を、きわめて簡明に、またきわめてわかりよく、説明して聞かせた⁴⁴」と記されている。

本稿で例に挙げてきたソクラテスの対話はどれも簡潔明瞭で直接的に問題の解決策を提案するものであったが、このエウテュデモスの例に限ってはかなり慎重に時間をかけて説得を試みていることがわかる。恐らくエウテュデモスが一七歳以下の年若い少年で先入観や固定観念に囚われているというよりは経験不足によって慢心しており、また、歳の離れたソクラテスを警戒していたためであろう。

巧みに相手の自発性を引き出し自ら学ぼうと意欲するようエウテュデモスを促すソクラテスの手腕は見事なものではあるが、まさしく話（ディスカール）概念と同様に一回性の唯一限りのもの⁴⁵で、例えば「方法」として取り出すことはできないと言っていいだろう。なぜなら、関わる相手の性質や能力の見極め、適切な判断はソクラテス本人に由来するもので切り離すことができない。そして、当然のことながら直接話しかけずに会話だけを聞かせて、しばらく時間が経過した後で一対一で対話をするという「方法」を取り出して実行したとしてもエウテュデモスと同様の結果は得られないだろう。また、教育の「結果」として実体化することもほとんど不可能である。教育においてはしばしばあることだが、エウテュデモスにはソクラテスによって教育せられたという自覚が全くない可能性がある。エウテュデモスにとってはよく出かける店で偶然ソクラテスと何度も出くわし、どういうわけかソクラテスと一対一で対話する機会を得たというだけであるかもしれない。同様に、ソクラテスが引き連れていた大勢の仲間、すなわち関係の「外側」にあった人々もソクラテスの関わりによってエウテュデモスの内面にどのような変化が生じたかという点については全く知りえない可能性がある。我々が「教育」の結果としてこの事例を知りうるのは、〈主観的認識〉に対して極めて自覚的なクセノフォンの名文を介しているために過ぎない。

エウテュデモスの事例からは第七稿で示したように、〈主観的認識〉の創造的発見は「離散的かつ、つねに一回限り⁴⁶」「臨場的指向しかもたないものなかににおいてしか同定されえない⁴⁷」「対話者相互の間のももの⁴⁸」の中でしか成立不可能であることがわかる。つまり、関係の築かれた双方の間にしか存在せず、客観的な実体を持ちえない。また、〈主観的認識〉に対して自覚的な人間でなければ認識することができず、関係に置かれた当事者ですら認識が変容したこと、あるいは変容させたことに無自覚である場合すらある。しかし、客観的な数値や指標を示すことができなかつたとしても、当事者にとっては決定的な変化を生じさせ実質的な「良い」あるいは「適切な」結果を生じさせていると言える。

そもそも〈主観的認識〉は「主体性」の二重性に基づく概念である⁴⁹。当たり前、常識的、些末と見える側面を持つ一方で、当事者に対しては問題を解決する決定的かつ実質的な答えと結果をもたらすという矛盾するように思われる〈主観的認識〉の実態は、「主体性」の二重性に基づいていると理解することも可能であろう。

4-3 奥田正造・クセノフォンの〈主観的認識〉が顕在化する哲学・教育学の盲点

〈能動的主体性〉に基づく行為は、外部からの評価を行為の目的とせず個人の資質の育成や内面の変化に重点を置くことが多いと考えられるため、行為のプロセスや内実を可視化しづらいと先に指摘しているが、客観的な実体を持たない〈主観的認識〉も同様に、その存在や機能を明示しづらい側面があると言うことができる。〈能動的主体性〉が持つ特質や〈主観的認識〉が持つ二重性はクセノフォン・奥田正造が評価されず不当に貶められてきた原因であると言うことができるだろうが、両者を評価する立場にある哲学や教育学といった研究領域において両者の業績を積極的に遠ざけるような傾向があったとは言えないだろうか。

例えば、クセノフォンは当時のギリシアにおいては「哲学者」として認められており、『ギリシア哲学者列伝』ではソクラテスの弟子として最初に名前が挙げられ「ソクラテスに憧れてその忠実な模倣者たろうとしていた」「その教養によってギリシア人の事績を示した上でソクラテスの知恵がどんなに美しいものであったかを思い起こさせた」等高く評価されている⁵⁰のにも関わらず、著作『オイノミコス』は経営学の書として位置付けられており、クセノフォンはソクラテスの哲学を継承し表現するほどの実力がなかったというような根拠の曖昧な酷評がなされている⁵¹。そこには、ソクラテスが「狂気」と呼んだ、実生活上に効用をもたらさない学問を崇高なものとして敬い、家政や経営のような現実的な結果を問う実務や実践を軽んじる姿勢を見ることができるかもしれない⁵²。

また、教育学研究においても「方法」については盛んに議論されるが、それが実質的にどのような結果をもたらすかという点については重要視されず、結果を問うときには客観的な数値や指標を基準としたエビデンスという形態が取られることが多い。また、第七稿においても問題を指摘しているが、教育学領域には何を目的として教育するかという点が曖昧なまま教育方法ばかりに注目するという傾向が見られる。例えば、国語科教育において高く評価されている大村はまに関する研究は、一人ひとりに異なる教材を作成する、同じ教材は二度と用いないといった特殊な方法に注目したものが多くみられるが、それが実際には何を目的になされていたかを明確化しないまま、例えば、論じている個々の教師や研究者がそれぞれに理想とする目的を自由に当てはめ多種多様な大村はま像が描き出され称賛されるという姿を見ることができる。それらの大村はま研究は、それぞれの提案する価値に基づき、大村はま自身とは別にとらえ直すことが必要であるが、今後の課題としたい。

本稿に論じたクセノフォン・奥田正造の〈主観的認識〉を鍛錬し自覚化・明晰化するという実践のあり方は、哲学・教育学における盲点を提示するものであったと言えるだろう。哲学においては、現実感覚や実生活に直結する「良さ」「適切さ」を明らかにするというクセノフォンにおけるソクラテスが最も重要としていた課題が無造作に捨象されており、教育学においては、結果を問うことがなおざりにされ、「良さ」「望ましさ」を限定し明確化するという課題が明示されて来なかった。今後は、哲学・教育学の前提に〈主観的認識〉が加わることで、新たな領域が切り開かれるとともに新たな発見がもたらされることが期待できるはずである。

注

¹・新妻千紘、戸田功、「大村はま「国語科単元学習」の倫理的背景：大村はま「国語科単元学習」の理念型構築の

- 第一段階に向けて(1)『埼玉大学紀要 教育学部 第68巻 第2号』埼玉大学教育学部、2019年、pp61-77.
- ・新妻千紘、戸田功、「大村はま「国語科単元学習」を貫く心情的基盤：大村はま「国語科単元学習」の理念型構築の第一段階に向けて(2)」『埼玉大学紀要 教育学部 第68巻 第2号』、埼玉大学教育学部 2019年、pp79-90.
 - ・新妻千紘、戸田功、「大村はま「国語科単元学習」の基底価値観：大村はま「国語科単元学習」の理念型構築の第一段階として」『埼玉大学紀要 教育学部 第69巻 第1号』、埼玉大学教育学部、2020年、pp13-32.
 - ・新妻千紘、戸田功、「大村はま「国語科単元学習」における教育観：大村はま「国語科単元学習」の理念型構築の第二段階として」『埼玉大学紀要 教育学部 第69巻 第1号』、埼玉大学教育学部、2020年、pp33-63.
 - ・新妻千紘、戸田功、「大村はま「国語科単元学習」の発展形態：大村はま「国語科単元学習」の理念型構築の第三段階として」『埼玉大学紀要 教育学部 第69巻 第2号』、埼玉大学教育学部、2020年、pp1-30.
- ² 新妻千紘、戸田功、「奥田正造による寓話「仏様の指」の真意：報告者大村はまの主体性のあり方の違いを手がかりにして」『埼玉大学紀要 教育学部 第70巻 第2号』、埼玉大学教育学部、2021年、pp163-174.
- ³ 新妻千紘、戸田功、「関係を前提とした教育行為を解明するための理解の方法の提案：バンヴェニストにおける話（ディスカール）の概念を手がかりとして」『埼玉大学紀要 教育学部 第70巻 第2号』、埼玉大学教育学部、2021年、pp175-190.
- ⁴ Ξενοφών “ΑΠΟΜΝΗΜΟΝΕΓΜΑΤΑ” 邦訳書：『ソクラテースの思い出』訳者：佐々木理、岩波書店、1953年.
- ⁵ Ξενοφών “Οἰκονομικός” 邦訳書：『オイノミコス 家政について』訳者：越前谷悦子、リーベル出版、2010年.
- ⁶ 同書 p30-34.
- ⁷ 同書 p70-83.
- ⁸ 奥田正造、『奥田正造全集 上巻』奥田正造全集刊行会編集、信濃教育会出版部、1959年、p208-212.
- ⁹ 同書 p211.
- ¹⁰ 同書 p192-208.
- ¹¹ 同書、p199.
- ¹² 前掲書5 p88.
- ¹³ 前掲書4 p21-22.
- ¹⁴ ソクラテースと「神^{ダイモニオン} 霊」の関係に触れた論稿自体はいくつかあるが、本稿のように合理的・現実的観点からその機能を明らかにするものは見当たらず、また、それらの論稿ではクセノフォンの記述は無視されていることが多い。唯一、クセノフォンにおける「神^{ダイモニオン} 霊」に関して触れたものに「ソクラテースのダイモニオンについて(三)：クセノポンのソクラテース像」(田中龍山、『龍谷大學論集 479号』、龍谷学会、2012年、p100-122)があるが、占いに際しては自ら影響を及ぼせる範囲とそうでない領域を明確に区別しなければならないというソクラテースの教えに関して間違った理解が見られる。田中氏はこの教えについて「畑に苗を見事に育てた者も、誰がその実をとり入れるかは明白ではなく、家を立派に建てた者も、誰が住むか明らかでない」という前掲書4(p23)の引用を踏まえて「誰が収穫するか」「誰が住むか」に関しては、技術のあざかり知らぬことであつたとしても、「有益かどうか」を見定めることのできない技術がありうるだろうか」と述べて、「明確な基準に基づいて区別されているようには思えない」(p118)と指摘している。これは読み間違いである。クセノフォンは前掲書4(p23)で自らの知恵で判断できることは神に尋ねるべきでないと述べており、クセノフォンの基準では「有益かどうか」が自らの技術によって判断可能であれば占うべきでないと明確に判断することができるからである。
- ¹⁵ 前掲書4 p23.
- ¹⁶ 同書 p24.
- ¹⁷ 前掲書8、p203.
- ¹⁸ ここで先に触れた「神^{ダイモニオン} 霊」の機能を考察することができる。「神^{ダイモニオン} 霊」の声は、プラトン版・クセノフォン

版の双方とも対話の最中に突如としてソクラテスに示されることが多い。したがって、「^{ダイモニオン}神 靈」の声はソクラテスの「直感」を意味するのではないかと推測される。神や占いが自ら影響を及ぼせる範囲とそうでない範囲を明確に区別する効用を持つとの指摘を行ったが、「直感」とはそれを得るプロセスや結果の保証が明瞭には示せない推察を指すと言える。そのような意味で、説明することができないという「直感」の特質を「^{ダイモニオン}神 靈」とソクラテスは呼び表したのではないだろうか。そうであれば、なぜソクラテスが重要な局面において「^{ダイモニオン}神 靈」の論しに従うのかという点を説明することができると思われる。なお、重要な局面の具体例としては、ソクラテスの死刑が求刑された裁判において、「^{ダイモニオン}神 靈」の論しがあったため、死刑を免れるための演説をあえて行わなかったとソクラテスが述べていることを挙げられる。ソクラテスの弁明はプラトン・クセノフォン双方が書き残しているがこの記述は一致している。『プラトン ソクラテスの弁明ほか』（田中美知太郎・藤澤令夫訳、中央公論新社、2002年）、『ソクラテスの弁明・饗宴』（船木英哲訳、文芸者、2006年）参照のこと。

¹⁹ 法母庵友の会『桃李集 奥田正造先生の人と教育』中村一雄編集、丸山印刷、1977年、p344-345。

²⁰ 同書 p345-346。

²¹ $\Xi \epsilon \nu \circ \phi \acute{\omega} \nu$ “ΑΝΑΒΑΣΙΣ” 邦訳書：『アナバシス 敵中横断 6000 キロ』訳者：松平千秋、岩波文庫、1993年。

²² 『ソクラテス言行録1』（内山勝利訳、京都大学学術出版会、2011年）の解説からの引用。そもそも、ソクラテスは何も書き残しておらず、ソクラテス以外の人物による記録からしかソクラテス像を構築できないのにも関わらず、「ソクラテスの哲学的含意を十分にすくい挙げてはいない」と指摘する内山の記述には偏向が見られ不適切であろう。内山は恐らくプラトンとクセノフォンのソクラテス像と本来のソクラテス像を混同しており、なおかつプラトンにおけるソクラテス像を無前提に本来のソクラテスであると捉えている。内山は他にも『アナバシス』（前掲書21）でクセノフォンがソクラテスの忠言に従わなかったことを踏まえて「少なくともいまだこのときには、彼が忠実なソクラテスの徒ではなかったことを読み取ることができる」と述べているが、こちらも不適切であろう。クセノフォンはキュロスの知遇を得るためにペルシアに出かけるべきかどうかをソクラテスに相談したところ、ソクラテスはデルフォイの神託に従うように勧めたが、クセノフォンはペルシアに出かけることを自ら決断し、どの神に祈願すれば無事帰国できるのか神託に尋ねたとされている。この記述のある『アナバシス』『ギリシア哲学者列伝（上）』（ディオゲネス・ラエルティオス著、加来彰俊訳、岩波書店、1984年、p158）の両方で、ソクラテスはクセノフォンがソクラテスの意図とは異なる神託を尋ねたことを咎めたものの、尋ねてしまった以上神託に従って出発すべきであると述べたと記されている。この逸話はソクラテス・クセノフォンの距離の近さや対等な関係を読み取ることができるものでもあり、ソクラテスを「無視するように」出征を「断行」したクセノフォンは忠実な弟子ではなかったという内山の理解には無理があると思われる。（p280）内山の解説には不適切な根拠とともにクセノフォンを貶めるような記述が他にもいくつかあり、このような評価を下している先行研究は内山に限らず数多くある。（注14に取り上げた田中龍山も第一章で論じた神々を介在させる判断の技術についてプラトンと比較すると「きわめて通俗的」と述べている。）このように、先行研究におけるクセノフォンの評価は「通俗的」「浅薄」「哲学的ではない」「ソクラテスを知るために役に立たない」といったものが多い。これらの評価の多くを総括して多く引用した論稿に「クセノフォン『オイコノモコス』における哲学者と教育」（近藤和貴、『政治哲学 第17号』、政治哲学研究会、2014年、p68-98）があるため参照のこと。ちなみに近藤和貴の論稿はクセノフォンに対して適切な評価を下すというスタイルを取っているが、『オイコノモコス』は教養のないクリトプロスや聴衆に合わせた議論を行なっているだけで、ソクラテス自身は家政や農業には関心がないといった突飛な議論が展開されている。

²³ 前掲書5 p36。

²⁴ 同書、p58。

²⁵ p 214、p194-196。

²⁶ 『オイコノモコス 家政について』（前掲書4 p38）には、イスコマコスが結婚した当時、妻は15才であったとの記述がある。また、旧制の女子中等教育機関である成蹊女学校では12歳～17歳の女子生徒が教育を受けていた。

²⁷ 前掲書4、p59-69。

²⁸ 前掲書4、p70-88。

²⁹ 前掲書8、p196-197。

³⁰ 『日本大百科全書（ニッポニカ）』（小学館、1994年）「女子教育」「諸外国の女子教育」（小股憲明）の項目を参照。

³¹ 前掲書8、p192。

³² 同書、p203.

³³ 前傾書 4、p227-228.

³⁴ 注 31 に同じ。

³⁵ 同

³⁶ 前傾書 4、5 を参照のこと。

³⁷ 本稿の「ソクラテス」は、クセノフォンにおける「ソクラテス」像のみを対象としていることを付記しておく。プラトンにおける「ソクラテス」像はクセノフォンと共通する部分もあるが、矛盾する点も数多く見られる。この点に関しては稿を改めて論じることにはしたい。

また、『ギリシャ哲学者列伝（上）』（注 22 参照）には、ソクラテスの弟子として最初にクセノフォンの名が挙げられ「彼はその教養によってギリシア人の事績を示した上で、ソクラテスの知恵がどんなに美しいものであったか思い起こさせた」（p165）との記述があるため、本稿ではクセノフォンの思想とクセノフォンにおける「ソクラテス」が持つ思想を区別していない。

³⁸ 前傾書 4、p103-109.

³⁹ 同書、p107.

⁴⁰ 同書、p177.

⁴¹ 同書、p177-195.

⁴² 同書、p180-195.

⁴³ 同書、p195.

⁴⁴ 同

⁴⁵ 前掲書 3 で詳細に論じている。

⁴⁶ Émile Benveniste “PROBLÈMES DE LINGUISTIQUE GÉNÉRALE” Éditions Gallimard, Paris, 1966. 邦訳書：「一般言語学の諸問題」訳者：河村正夫、木下光一、高塚洋太郎、花輪光、矢島猷三 共訳、みすず書房、1983 年、p 234

⁴⁷ 同書 p246

⁴⁸ 同書 p242

⁴⁹ 前掲書 3 で論じている。バンヴェニストは「言語の二重性」について次のように述べている。

言語は変化する社会の中で恒常性を保ち、多様化してやまない活動に一貫性を与えるものなのです。それは個別の多様性を通じて存在する同一性なのです。そして、ここから、個人に内在的でありながら、同時に社会をも超越するものとしての、言語の根本的に相矛盾する二重の性質が生じてきます。この二重性は、言語の全ての特質に繰り返し見出されるものです

前掲書 3 において、著者は言語と主体性が分かち難く結びついており、どちらかが欠ければ一方は十分に機能しなくなる実態に基づいて「言語の二重性」は「主体性の二重性」に置き換えて理解することが可能であるという議論を展開している。

⁵⁰ 注 37 を参照のこと。

⁵¹ 注 22 を参照のこと。

⁵² 注 22 に挙げた近藤和貴の論稿がこれに該当する。

(2022年3月31日提出)

(2022年5月7日受理)